

泪壺

2008(平成20)年3月20日鑑賞<ユウラク座>

★★★



監督＝瀬々敬久／原作＝渡辺淳一『泪壺』（講談社刊）／出演＝小島可奈子／いしだ壱成／佐藤藍子／西村みずほ／染谷将太／菅田俊／柄本佑／蒼井そら／佐々木ユメカ／三浦誠己／及川以造（アートポート配給／2007年日本映画／110分）

……渡辺淳一文学の映画化だが、『マリッジリング』（07年）と同じく単館上映なのはなぜ……？ 全く性格の異なる姉妹だが、なぜか想う男は同じ。そこで生まれた泪壺とは……？ そして、再会を果たした男女の恋の行方は……？ 注目は映画初主演となる小島可奈子の3度にわたる大胆なベッドシーンだが、その必然性と満足度は……？

同じ渡辺文学でも、えらい違い！

渡辺淳一といえば、かつての黒木瞳のデビュー作『化身』（86年）や『失楽園』（97年）、『愛の流刑地』（06年）など、原作も映画も大ヒットしている、ちょっとエッチな人気作家ナンバーワン。その渡辺淳一の同名短編小説を映画化した『泪壺』だから、是非観なければと思ったが、なぜかこれは、渡辺文学の1つである『マリッジリング』（07年）と同じように大阪ではユウラク座1館のみの上映だし、新聞での紹介もほとんどない。つまり、もともと期待のかけ方が『失楽園』や『愛の流刑地』とは大違いというわけだ。いしだ壱成、佐藤藍子、柄本佑らはビッグネーム（？）だから私もよく知っているが、映画初出演で大胆なベッドシーンに挑戦したという小島可奈子も、「ピンク四天王」と呼ばれている瀬々敬久監督も、これまで私は全然知らなかったもの。

映画の成否、興行収入の多寡は必ずしも作品の善し悪しによるものではなく、もともとのウエイトの置き方や宣伝の仕方によって異なるということが、『マリッジリング』や『泪壺』を観るとよくわかる。同じ渡辺文学でも、えらい違いだ。

愛憎劇の基本構造は……？

『失樂園』も『愛の流刑地』も、ひと言で表現すれば命を懸けた徹底した不倫モノ……？ そして、それが渡辺文学の真骨頂……？ しかして『泪壺』は、乳ガンによって妹の愁子（佐藤藍子）が死亡した後、その夫雄介（いしだ壱成）と、少女時代から彼を大好きだった姉の朋代（小島可奈子）との間の悲恋（？）をメインストーリーとしたもの。

しかし、雄介の妻愁子が死亡した後、気持の整理さえつけば、雄介が愁子の姉朋代と再婚しても社会的には何ら非難されるものではなく、むしろ戦時中などはそれが望ましいとされたケースもあるはず。したがって、昔気質の父親周吾（菅田俊）が、雄介と結ばれることを秘かに願っている朋代に対して「いやらしい考え方を捨てろ」と決めつけるのは、あまりにも横暴。また、雑誌社に勤め作家を目指している雄介の新たな彼女になっているらしいフラワーコーディネーターの麻子（佐々木ユメカ）も、朋代と雄介がそういう仲になっていることを知ると、えらく軽蔑したような非難を浴びせたが、これも筋違い！

もっとも、こんな愛憎劇を赤裸々に描くのが渡辺流だが……。

割れたある壺と新たな泪壺

この映画の重要な小道具はタイトルどおり泪壺だが、それは一体ナニ……？ 泪壺とは死亡した愁子の遺言どおり、彼女の骨によってつくられた白い壺のこと。雄介の「ワケあり依頼」に理解を示し、あえてそれをつくったのは著名な陶芸家斯波（及川以造）だが、実はその作品は1カ所朱色のムラがある失敗作。そこで斯波はそれを叩き割ろうとしたのだが、雄介はそれを愁子の泪だと主張し、その泪壺を大切に保管したわけだ。

そんな泪壺の誕生に至るまでの伏線として、1つの重要なエピソードがある。それは、17歳の朋代（西村みずほ）が、家を訪れていた若い頃の雄介（染谷将太）に死んだ母親が大切にしていた牛の骨灰でできたボンチャイナの壺を見せようとして手が触れ合った時、ハッとして手を離れたためその壺が落ちて割れてしまったというエピソード。これによって父親の周吾からこっぴどくしかられた朋代は、その後瞬間接着剤（？）で壺を修復したが、その様子を見た父親が「母親に似て頑固な娘だ」と嘆い

たのは当然。

こんなシーンから端的にわかるように、周吾の、姉朋代と妹愁子に対する接し方が全然違っていたことが、朋代と愁子の性格の相違に大きく反映したようだ。このつぎはぎだらけの壺が、その後の朋代や雄介たちの運命を象徴することに……。

朋代の内向的性格形成の要因は……？

この映画には、朋代が17歳の頃の愁子と雄介を交えたいくつかのエピソードが描かれるが、これは原作にはないものらしい。

朋代はピアノ教師として働いている美人で身持ちの固い女性だから、彼女の崇拜者が周りにたくさんいたのは当然。しかし、朋代が彼らに全然関心を示さないのは、少女時代から雄介が大好きだったため……？ また、涙をこらえると無性に外に出て走りたくなり、突然全速力で走り始めるという奇妙なクセができたのは、父親が何かと長女の朋代に厳しく当たってきたせい。そんな父親との確執のおかげで、いまだに朋代はいい男に恵まれていないわけだ。また愁子が死亡した後は、1人で父親の世話をしなければならなくなったのも、朋代が男運に恵まれなかった1つの要因……？

朋代の男性遍歴は……？

そんな風に形成されてきた朋代の内向的な性格のため、愁子の死亡後雄介に対して想いを打ち明けることができない朋代は、ある時期からその男関係が突然狂い始めることに……。

朋代の意外に豊満なヌード姿を最初に拝めるのは、雨の中涙をこらえながらあぜ道を走っている中、田んぼの中に倒れ込んだ朋代を助けてくれた同僚の皆川（三浦誠己）の家の中。そこで展開されるあまり必然性のない(?)セックスシーンでは、何とそれまで朋代が1度も男性体験がなかったことが明らかに……。

雄介のことを思い続けながらそれを打ち明けることができず、悶々とした気持で毎日を過ごす朋代の男性遍歴が、その後どのように展開されたのかはわからないが、朋代の次のヌードシーンは、ラブホテル内での昔の教え子堂本（柄本佑）とのセックスシーン。これはカノジョ（蒼井そら）に振られた堂本を酒の勢いで自分から誘ったものだから、彼女の男性遍歴が想像できるのでは……？

「ピンク四天王」と呼ばれる瀬々敬久監督らしいタッチでこの2つのセックスシー

ンが描かれた後、遂にある日朋代と雄介が結ばれることになるのだが、さてその必然性とこの映画のメインとなる2人のセックスシーンの濃密度は……？ また、その満足度は……？

再会からどんなエンディングに……？

雄介と朋代のセックスシーンが登場する前提としては、当然雄介と朋代の再会シーンがあるわけだが、さてそれはどんな偶然から……？ どこで、どんなきっかけからベッドシーンに……？

17歳の朋代が、天体観測のために東京から2人の友人と共にやって来た雄介とはじめて出会ったのは、1986年の冬。つまり、アメリカが打ち上げたスペースシャトル・オービタ、チャレンジャー号の爆発事故が起きた1986年1月28日の前後のこと。それから数年を経て、今やっと朋代は雄介と結びつくことができたのだが、そんな朋代の目前にはあの泪壺が……。そんな状況設定を見ていると、ハッピーエンドが期待できないことは明らかなが、スペースシャトルの爆発事故と同じような悲しい結末は、あなたの目で……。

懐かしい沢田知可子の歌声にビックリ！

沢田知可子が歌った1990年のヒット曲『会いたい』は、過去の人気曲ベスト100を選ぶ企画などでは、常にベストテンに入る名曲。芸能界には「一発屋」というイヤな言葉があるが、それ以外のヒット曲を聴いたことがないという意味では彼女もそうかもしれないが、歌の実力は折り紙つき。

この映画のエンディングはそんな沢田知可子が歌う『花心～Lullaby～』。その歌声は耳に残るが、3月16日に観た『犬と私の10の約束』（08年）の主題歌でBoAが歌った『be with you.』ほどのインパクトがなかったのは残念。

2008(平成20)年3月22日記